愛知教育大学研究報告，49（教育科学編），pp. 133～142, March, 2000

# 幼稚園生活の中で幼児は「お友達」「仲間」をどのように捉えているのか

## ―二年保育年少組の一年間の記録から―

中　島　寿　子

Hisako NAKASHIMA

（幼児教育教室）

## 1　は　じ　め　に

保育の場において，子ども達がお友達と仲良くすること，そして仲間関係を築いて行くことは自明のこととして期待されているが，子ども達は，園生活を共にする「お友達」「仲間」をどのように捉えているのだろうか。

この問題について検討したものに鳥光ら（1996）の研究がある。[1]この研究は，就学前施設における子ども達の friendship について解釈的研究をしている Corsaro の立場に立つ。

このアプローチでは「子どもは意味を付与された世界を発見する社会的存在」で，「コミュニケーションと言語の発達によって，他者と相互作用し，子ども達自身の社会的世界を構成する存在」[2]と考える。

「親や保育者から教えられる friendship 概念を単に受動的に習得するだけでなく，自ら概念を構成し，それを能動的に運用して幼稚園生活を形成する存在として子どもを捉えるのである」。

この考えをふまえ，鳥光ら（1996）は「friendship 概念を子ども達が生活の中で運用していくことによって再生産する社会・文化的概念と捉え」「幼稚園に通う子ども達が『お友達』『仲間』といった，friendship にかかわる概念をどのように捉え，園生活においてそれらをどう用いているのかについて，観察で得られた事例をもとに報告」している。

「また，園生活のなかでの子ども達の friendship 概念は，子ども達同士のかかわりの中で構成されていくものであるが，それは保育者の提示する『お友達』『仲間』概念と無関係に存在するものではない。また保育者のそれとの対比において子ども達独自の friendship 概念がより明確になると考えられる。このような意味において，保育者の提示する friendship 概念とも関連させながら，幼稚園生活の中でみられる子ども達の friendship の概念を検討」している。[3]

研究対象とした園は自由遊びを保育の中心とするH幼稚園で，平成8年10月から12月までの3ヶ月間，週1度の午前中に3，4，5歳児クラスについて，登園後の自由遊びとそれに引き続くお集まりの時間を中心に参与観察している。そして，各クラスの中で「仲間意識」が強く，主導的に支配しようとする子に焦点をあてて考察している。

例えばある3歳児は，「仲間意識」の強い子と靴という所有物が「同じ」と確認し「仲間」と言い合い関係を補強する一方，同じ靴を履く他児には大きさが「違う」と敢えて差異を見つけ仲間と認めなかった。また，一時的であれ遊びを共有している子が仲間であるとして，自分達の遊びに入って来ようとする子を排除した。この子は仲間か否の基準をおそらく持っているだろうが，それは恣意的なもので，仲間か否かの明示化だけでなく，排除の手段としても用いられているようだと考察されている。

5歳児では，「お集まり」の時間に「仲間が来ないとおもしろくない」と言ってクラスから出ていった子がいたが，その子にとっては「その日一日一緒に遊んでいた子ども達」が仲間であるという。また，ある5歳児は，排除した子を後の戦いごっこの時には呼びに行ったりと，恣意的にその関係を定義していた。

そして，いずれのクラスも保育者は「みんな仲良く」という「公的なお友達概念」を子ども達に示しており，それが3歳児，4歳児の場合，保育者への抵抗という形にもなるが，5歳児の場合はそれを意識し，「武器を使ったりしない」「泣かしてはいけない」という基準のもと自ら規制する姿もあったという。

このような結果に加え，鳥光（1996）らは friendship について大人の視点からだけでなく，子どもの視点からも研究していくことの重要性も指摘している。

この研究からは，その他にも様々な知見が得られるが，以下の点については検討されていない。

(1) friendship にかかわる概念として「お友達」「仲間」をあげているが，事例を見る限りでは，保育者は「お友達」，子ども達は「仲間」という言葉しか使っていない。「お友達」「仲間」について，それぞれ検討してみる必要があるのではないか。

(2) 「friendship 概念を子ども達が生活の中で運用

していくことによって再生産される社会・文化的概念」として検討するには，もっと長いスパンで子ども達の園生活を観察していくことが必要ではないか。

以上のことから，本研究では筆者が幼稚園入園から一年間の子ども達の園生活を観察した記録の中で，子ども達・保育者が「お友達」「仲間」を口にした場面を手がかりに，

・子ども達・保育者が「お友達」「仲間」をどのような意味で捉えているのか
・そしてそれは入園からの一年間でどのように変容するのか

について，Corsaro や鳥光らの研究から得られた知見も参考にしながら考察することを目的とする。

## 2　研究の方法

**●事例で取り上げる園**

都内公立幼稚園（以下Ｓ園とする）。

Ｓ園はＨ園と同様，自由遊びを保育の中心としており，お弁当の前には保育者と一緒にクラス全員で遊ぶ時間（Ｈ園で言う「お集まり」の時間）を持つことが多い。小学校以上に比べ，園生活の内容が多種多様な幼稚園の中では園生活の流れはかなり似ているのではないかと思われる。

**●事例で取り上げる子ども達**

Ｓ園に平成７年４月に入園した二年保育年少組（４歳児クラス）の13名（男児８名女児５名）。このうち７名は同じ社宅から来ており，幼なじみの子もいた。近所の公園で出会っていた子もいたようである。

またこのクラスは第二子，第三子が多く，入園前から母親に連れられ幼稚園を訪れる機会があった子もいた。そのためか，園生活に馴染むのが比較的早かった。

**●事例でとりあげる保育者**

保育歴約20年の保育者。仮に「M先生」とする。

**●観察の方法**

平成７年４月より平成９年３月にかけて週１度の割合で通い，参与観察した。午前の自由な遊び時間からお弁当を食べ始めるまでの２～３時間である。

大半の場合，ビデオ録画したが，録画する際にはビデオカメラをお腹のあたりに固定し，子ども・M先生の姿が映っていることを確認したら，あとはその場の出来事を自分の目で見守るようにした。

**●Ｓ園における筆者の立場**

筆者（以下「私」とする）はＳ園の保育者ではないため，危険がある時，子どもが助けを求めて来たり話しかけたりする時以外は最小限のかかわりをするようにした。子ども達は私のことを「時々幼稚園に来て自分達のことをビデオカメラでとる先生」と思っていたようである。私を呼ぶ時にも「せんせい」と呼んだ。

担任以外にフリーの保育者がいたこと，私が入園当初からＳ園に通ったこと，他の保育者と「先生」と呼び合っていたこと等が関係しているのかも知れない。

**●M先生との話し合いについて**

子ども達がお弁当を食べ始めてからの数分間，その日の保育でわからなかった点，質問したい点，気になる子どものこと等について尋ね，答えていただいた。

それ以外にも，年に数回，私がまとめた記録をもとに話し合う時間を作っていただいた。記録した出来事の前後の文脈でわからなかった点，保育的意図を聞きたい点，私の解釈の妥当性，一人ひとりの子どもの今の課題，保育者としてのM先生自身の課題等についてコメントして下さった。

**●事例のまとめ方**

その日にあったことを簡単なメモを頼りに思い起こしながら，自分が感じたこと，考えたことも含め記録した。その後，録画したビデオをくり返し見て，M先生や子ども達の言動，その場の文脈等について補ったり確かめたりした。

以上の記録をもとに，子どもやM先生が「お友達」「仲間」を口にした場面を取り上げて事例をまとめた。事例の考察の際には，M先生との話し合いで得られたことも参考にした。

本研究では前述のとおり，二年間の観察記録のうち，入園してからの一年間をとりあげる。

家庭中心の生活から幼稚園という新しい場を得，同年齢の子どもたちと園生活を共にする中で「幼稚園に通う子ども達が『お友達』『仲間』といった friendship にかかわる概念をどのように捉え，園生活においてそれらをどう用いているのかについて」変容が見られると考えたためである。

## 3　事例と考察

以下，「お友達」「仲間」各々について，子ども達の場合とM先生の場合に分けて事例をあげ，考察して行く。（事例に出てくる子どもの名前は全て仮名である。また，＊＊＊は会話を聞き取れなかった部分である。）

### 1　子どもが語る「お友達」

#### (1)「知っている子」あるいは「仲良しの子」という意味での「お友達」

【事例１】「だって友達でしょ」　5/2　保育室

けんは幼なじみのさやかとおままごとコーナーにいる。「立ち入り禁止」と言いながらコーナーを衝立，椅子で囲い，入口も積木で塞ぐ。

そこにしゅんがやって来て，ドアをノックする真似をして「トントントン」と言う。けんは「入れない」「立ち入り禁止なんだよ」と言う。

すると，そばにいたゆかが「だって友達でしょ」と言う。しゅんも真似して「だって友達でしょ」と言う。

けんは「それでもだめ。だめだもん。入っちゃ」と

言うが，ゆかは「ここ幼稚園なんだからね」と言い，しゅんも「ここ幼稚園なんだからね」と言う。けんと一緒にいるさやかも「幼稚園じゃなかったらいいけどね」と言う。しゅんは「でも幼稚園なんだよ」と言って「入れて」と中に入ろうとする。

しかし，けんは「入っちゃだめなの」「だって，さっき，俺が考えたんだもん」と言い，結局しゅんは中には入れなかった。

第二子，第三子が多かったこのクラスで，けんは唯一の一人っ子で，入園当初は幼なじみのさやかとだけ遊ぶことが多かった。初めての幼稚園生活の中で自分を守ることが大事だったことが二人以外に誰も入れない「立ち入り禁止」の場を作ることでもわかる。

一方，ここで「友達でしょ」「幼稚園なんだからね」というゆかは月齢も高く口も達者な子で，兄もこの園の卒園生である。母親から言われたことや保育者の関わり等から「幼稚園ではお友達と仲良くすべき」「クラスのみんながお友達」と捉えているようである。そして，それを根拠にけんにしゅんをおままごとコーナーに入れるように主張する。そして，ゆかのように理解しているようではないが，しゅん，さやかもゆかの主張に同意する。

Corsaro（1985）の観察したnursery schoolの子ども達も，play groupsへ入れる時，あるいは入れない時の根拠として，friendshipに言及していた（“friend”あるいは“best friend”を口にした）と言う。[4)]

【事例2】「いいの，友達だから」　5/2　砂場

数人の子が砂場で遊んでいる所にゆか・ちかが来る。ゆかは「まみちゃん！」と砂場で遊んでいたまみに声をかける。ゆかもちかも砂遊びを始めるが，ひろむ以外の子はまみを含め次第に砂場からいなくなる。

まみの掘った穴にゆかが水を入れ，ちかがスコップでつつく。

それを見たひろむが「これね，あの子が使ってたやつだよ。まみちゃんが使ったやつなんだからね。なんでやっちゃうの？まみちゃんのなんだよ」と一生懸命言う。するとゆかは「いいの，友達だから」と言う。

それを聞いたひろむは「じゃ，ぼくは？」と聞く。するとゆかは「あんたは友達じゃない」と言う。しかし，その直後に私と目が合うと「うそ言っちゃった」とペロッと舌を出して笑う。

これは事例1と同じ日で「友達」に言及しているのも同じゆかである。まみが使っていた遊具を使っていることをひろむに指摘され，使っていい根拠として「友達だから」と言っている。自分はまみが使っていた遊具を勝手に使ってもいいくらい，まみと仲良しなのだということらしい。

「じゃぼくは？」と聞いているひろむはクラスで一番月齢が低く，言動も幼いので，赤ちゃん扱いされることの多い子だった。

ゆかの「あんたは友達じゃない」も「うそ言っちゃった」と言っているように，本当は「お友達」と思っているのだが，「お友達」についてまだよくわかっていない幼いひろむをからかったと思われる。

【事例3】「知ってる？」　6/20　保育室

たけし，ひろむ，まこと，しゅんが保育室で積木のお家を作っている。その最中に，突然ひろむがたけしに「ねえ，さとうこうたって知ってる？」と聞く。

たけしは「こうたって知ってるー。たけしのお友達のさとうこうたー」と言う。

「知ってる？」と話題になったのは，入園当初一人で遊ぶことの多かったこうただった。小さな妹が二人もいて，入園前は公園など子ども達の出会いの場に行くことも難しかったため，周りの子の中に彼の存在が位置づくまでは少し時間のかかった子だった。

「知ってる？」と聞いたひろむは「こうた」という子がいることをそれまで知らなかったのかも知れない。

ここでたけしが「たけしのお友達のさとうこうた」と言う表現をしているが，他にも同じ言い方をした子がいた。事例1，2に出てきているゆかと事例2に出てきているちかである。日付も同じ5/2である。

【事例4】「私のお友達」　5/2　園庭

園庭に2つのサッカーゴールを向かい合わせてくっつけ，お家のようにして，その中にうさぎを入れている。たけし，まこと，ゆか，ちかもその中にいる。

たけしはうさぎを抱っこしているが，他の子は恐くて抱っこできない。それを二階から見ていた年長男児が「おい，うさぎの持ち方教えてやろっかー」と大声で声をかける。それを聞いたゆかは「たけしならできる。私のお友達」と言う。ちかも「ちかもー。ちかのお友達もー」と言う。

入園当初は，事例3のひろむがたけしに尋ねたように，同じクラスにいるからといって，誰とでも遊ぶわけでもお互いのことを知っているわけでもない。少しずつ周りの子が「知っている子」になり，一緒に楽しい時間を共有する中で「仲良しの子」もできる。

そういう時期だったから，このような表現をしていたのかも知れない。

### (2) 「同じクラスの子」という意味での「お友達」

「知っている」あるいは「仲良し」と言う意味をもたず，「同じクラスの子」という意味で「お友達」と言っ

ていると思われる子もいた。

【事例5】「お友達も全部黄色」　10/17　保育室

**ちか**が保育室に戻ってきて，黄色いセロハンを丸めたものを手にして私の所に持ってくる。「こういうふうになるとよく見えるよ。開いてね」とセロハンを広げて目にあてる。

私が「黄色に見える？」と聞くと，**ちか**は「全部黄色，先生も黄色」と笑う。**みき**がやって来ると「お友達も全部黄色」と言う。

このような表現は，後述する保育者の「お友達」の使い方の影響も受けているかも知れない。

### (3) 「ごっこ遊びの中の関係」という意味での「お友達」

子どもが「お友達」を口にすることは1学期には時々聞かれていたが，次第に少なくなった。人数も少ないこのクラスでは，偶然出会って一緒に遊ぶ経験，保育者と一緒にクラス全員で遊ぶ経験の中で，お互いのことを知ることができ，周りの子が「お友達」であることが自明のこととなり，あえて口にする必要がなくなったのかも知れない。(そのかわり，後述するように「仲間」という表現が増えていく。)

しかし，2学期になると，ごっこ遊びの中で「お友達」という言葉を使う子が出てくる。

【事例6】「友達なのね」　11/21　保育室

この日は11：00まで作品展があったため，保育室には子ども達が積木等で作った動物の家やミニ四駆のサーキット等が作ってあった。

**ゆか**，**まみ**，**みき**が保育室に戻って来て，動物の家で遊ぼうとする。**ゆか**は，**まみ**を「うさぎの家」に，**みき**は，**まみ**を「ねずみの家」に連れて行きたくて，二人はもめる。

**まみ**は「どれにしようかなー……」をやり出して，**ゆか**の家に入ることになる。**みき**は「あ，どっちもねーつながってる＊＊つながってるからいいんじゃないの。3人とも＊＊だし」と二人に何か話す。そして**みき**は**まみ**に「友達なのね」と言う。

**ゆか**と**まみ**は，「お姉さま元気を出して」「行きましょお姉さん」と話しながらうさぎの家から出て行く。**みき**はそれを聞いて「お姉さんだって」と私に「お手上げポーズ」をして笑い，二人について行く。

【事例7】「友達のことにしよ」　12/12　保育室

みんなでサンタクロースとトナカイを作ったこと，ハムスターを飼っている子がいること，ゲームで「ねことねずみ」をやったこと等から「動物を作りたい」と言う子が出てきて，M先生は画用紙と空箱での動物の製作の時間を設けた。その後，動物ごっこを楽しむ姿が見られる。

この日も**ひろむ**，**まこと**，**こうた**が製作テーブルの所でストローをハサミで小さく切り缶に入れている。「動物のえさ」を作っているらしい。

保育室に**たけし**が戻ってくる。自分が積み上げた積木に画用紙で作った動物をのせて遊び始める。**しゅん**も保育室に戻ってきて，「**たけし**一緒に遊ぼ」とやって来る。

**たけし**はまた画用紙でハムスターを作ると言って製作テーブルへ行く。**しゅん**もついて行く。**しゅん**はストローを切っている子達から，動物のえさを作り終わったらごっこ（おそらく動物ごっこ）をすることを聞く。

すると「じゃ，友達のことにしよ」と言い，「いいよ」と言われる。**ひろむ**も「じゃ，ぼくもお友達のことにしよ」というので，**たけし**も「じゃ，**たけし**もお友達のことにする？」と言うと，**しゅん**は「あ，違う。**たけし**だけはねー，兄弟」と言う。

同じ遊びグループではないのだが，おもしろそうだから一緒に遊びたい，でも自分達の遊びも続けたい。そういう時に「友達のことにしよ」と提案する姿があった。事例6で**みき**が言う「(各々の遊びの場をうそこで)つながってる（ことにしよ)」という言葉もこのような場合に出てきていた。そうすることで，二つの遊びの場を行き来することができるのである。

M先生に「つながってることにしよ」と言う表現について尋ねると，自分はそのような表現で援助したことはないとのことだった。子ども達の遊びの中から生み出されたものであるらしい。

また，ここで**しゅん**が「**たけし**だけは兄弟」と言っているが，**たけし**だけはもともと同じ遊びをしている同士だったため，「お友達」でなく「兄弟」にしたと思われる。

## 2　保育者が語る「お友達」

### (1) 「仲良くすること，配慮することが必要な相手」としての「お友達」

入園当初は自分の思いを言葉を伝えることができずに行動で訴えてしまう子，戦いごっこ等でも力の加減がわからず相手を泣かせてしまう子がいた。

そのような場面で「仲良くするように」「相手を配慮するように」との願いを伝えるためにM先生は子どもに「お友達」を口にしていたようだった。これは一年間を通じて見られた。

前述のように，事例1の**ゆか**の「友達でしょ」という発言も，このようなM先生の言葉を取り入れたのかも知れない。

【事例8】「お友達でしょ」　5/9　園庭

ひろむとさやかが画用紙で作った剣で戦いごっこをしている。しかしひろむは力の加減がわからず，剣を激しく振り回してさやかの顔にあたってしまう。

さやかは「あぶないよー」と行ってM先生の所に行ってひろむから叩かれたと言う。ひろむはM先生から「お友達でしょ」と言われる。

【事例9】「やだよ，友達が」　10/3　保育室

さやかが「魔法のきゅうり」を作り，誰かに食べてもらおうと思って「いかがですかー」と歩き回る。

すると，同じ積木の家にいたこうた，ゆうすけ，しゅんが手を伸ばすので，さやかは「ジャンケン」と言う。しかし，しゅんはお家から出て取りに行こうとする。ゆうすけは「ジャンケンだよ」と言うが，しゅんはさやかを追いかけ回す。さやかは「ジャンケン，ジャンケン」と言って逃げる。

それを見たM先生は「ね，ジャンケンだよって，しゅん君，言ってんのにとっちゃたらやだよー，友達が」と声をかける。しゅんは取り上げた「魔法のきゅうり」を食べる真似をした後，さやかに返す。

### (2) 「同じクラスの子」という意味での「お友達」

クラス全体の子に呼びかける時，M先生は「～のお友達」「～なお友達」というふうに呼びかける事が多かった(事例10)。しかし，その他にも「～の人」「～の子」と呼びかけることもあった（事例11)。

このように呼びかけるのは，クラスの子ども達をグルーピングするため，特定の子に呼びかけるため等いろいろな意図がある。しかし，それだけでなく，(1)にあるように「仲良くするように」という願い，そして「今一緒にいるクラスのみんながお友達なんだよ」ということ（鳥光ら（1996）の言う「公的なお友達概念」）を伝える意味もあると思われる。

またクラス全員に対して呼びかける時には「ももの お友達」と言うこともあった。その他にも「もも（組）さーん」，「みんな」と呼びかけることもあった。

【事例10】「真ん中のテーブルのお友達から」　5/16　保育室

お弁当の時間になる。3つのテーブルを合わせた所に各々椅子を持ってきて座る。

M先生は「真ん中のテーブルのお友達から」と言って真ん中のテーブルをふきんで拭く。そのテーブルの子はお弁当の入った鞄を取りに行ったのに，あきだけは座っている。M先生にもう一度言われてやっと鞄を取りに行く。

この事例は，記録の中で初めて「～のお友達」とM先生がクラス全員の子どもがいる場で声をかけたものである。入園後1ヶ月ほどたった頃で，それまでにもこのように呼びかけられたことはあったと思われるが，あきは「真ん中のテーブルのお友達」の中に自分が入っているということがわからなかったようである。

【事例11】「好きなお友達と」　2/6　屋上

しっぽとりをする。2チーム作るため，M先生は「好きなお友達と二人手一つないでね，お話聞いてよ，好きな子と手一つないだらジャンケンポンして勝った人が紅組に来て，負けた人が白組に来てね。わかった？」と説明する。子ども達は相手を見つけてジャンケンする。

ゆうすけは「俺最初から白，お互いチームでよかったな」とまことにうれしそうに言う。

*(「お互いチームで」は「お互い同じチームで」という意味)*

ここではM先生は「好きなお友達」と言ったり「好きな子」と言ったりしている。特に意識せず使っていることもあると思われる。また，子どもに呼びかける際の言葉として便利なため習慣化して使っていることもあるかも知れない。

鳥光ら（1996）も4歳児のゲームの場面を取り上げ，次のように考察している。

「保育者は，ゲームのルールに従って，子ども達の生活世界での『お友達』とは違った枠組みでのグループ化を試みようとしている。『誰かひとりあっちのお友達のところに行ってあげて』という言葉に示されるように，1人多いグループから，1人少ないグループへの子どもの移動を『お友達』という言葉で促している。このように子どもが日常的に仲のよい『お友達』グループから，別のグループをつくりだす過程で『お友達』という言葉が提示されたのは，保育者の固定的でない公的な『お友達』概念が表明されたものでもあるだろう。ここでは教室全体としての『お友達』やルールとしての『お友達』が提示されている。」

また，観察者は「保育者が頻繁に使用する『お友達』という言葉にとらわれてしま」ったと述べているが，先に述べたように呼びかける際の言葉として習慣化して口にする保育者もいると思われる。[5)]

## 3　子どもが語る「仲間」

### (1) 「一緒に遊びを共有する者同士」としての「仲間」

入園当初，一人であるいは幼なじみの子や偶然出会った子と遊びを見つけて楽しんでいた頃，記録の中にも「仲間」を口にする場面はほとんど見られなかった。

しかし，他の子の遊びに入りたい時には「仲間に入れて」と言う子は入園当初からいた。入園前から公園等で年上の子達と遊んでいた子もいたためか，遊びの

中で用いていたようで，自然に出てきた。(他にも「一緒に遊ぼ」「入れて」等言う子もいた。)

日本の場合はこの儀式的表現があるために仲間に入りやすいと言われている。[6]入園当初は「仲間」という言葉を口にする子でも，遊びに入れてもらう際の決まり文句としての意味が大きいと思われる。

その後，園生活を重ね，気の合う子同士で自分達の場を作り，遊びを展開して行くうちに，子ども達の中に他の子と一緒に遊びを共有する楽しさが強くなってくる。(M先生は5月上旬から6月上旬にかけて，自分の好きな子，興味のある子，好きな遊びで子ども達が動くようなってきたと言っていた。)

記録を見てみると，5月中旬頃から子ども達の中で，その時に一緒に遊んでいる子を「仲間」と言い表すことが増えてくる（このような「仲間」の捉え方は，前述の鳥光ら（1996）の3歳児，5歳児の事例でも指摘されている)。その中で，「仲間」であることを確認したり（事例12）一人でいることをさみしいと感じたり（事例13）する姿もあった。

【事例12】「俺達仲間だもんな」　5/23　保育室

ゆうすけ，こうた，まことが「天気予報，雨だー！」と大きな積木のお家に入る。後から来たしゅんも一緒に入ると，ゆうすけは「俺達仲間だもんな」と，しゅんを見ながらすました顔で他の二人に言う。

*(おうちを一緒に作ったのが「仲間」で，しゅんは違うとわざと言ってみたかったようだ。)*

もう一つ作ってあるお家に三人が移った時，しゅんは躊躇し，お家の外で「トントントン」と言う。M先生が「トントントンって誰か来てるよー」と声をかけると，「しゅん君だー」と迎えてもらえる。

前述のCorsaro (1985) の研究[7]では自発的なfriendship への言及は大きく二つにわけることができるという。一つは事例1で既に述べたように play groups へ入れる時，あるいは入れない時の根拠として言及される場合である。

もう一つは，何かをやっている途中で言及され，一緒に遊んでいるから今友達 (friend) だと言う場合である。ここでの「仲間だもんな」とゆうすけが言っていることと同じような意味を持つのかも知れない。

【事例13】「一人でつまんないだろ」　6/6　保育室

ゆうすけ，けん，まことはM先生に手伝ってもらいながら製作テーブルでガンダムのお面を作っている。その横でたけしはM先生にいろいろ話しかけ，M先生は3人の手伝いをしながら相槌を打っている。

*(たけしは3人の遊びにうまく入れなかったようだ)*

その後，3人がガンダムのお面をつけて遊んでいる時にたけしは幼なじみのまことに「まこと一仲間に入れろー」と少し威圧的な態度に出る。

各々が「俺～ガンダム」と言って役を決めて行くが，たけしが勝手に自分の役を決めてしまうので，まことが「だめー」と言う。その後も意見がまとまらない。

この4人の他にままごとコーナーではしゅんが一人で炊飯器をテーブルにのせ，粘土を入れてしゃもじでかき混ぜたりしている。

そこにたけしがやってきて「どうしたんだしゅん。一人でつまんないだろ」と拳骨を見せて言う。

*(「一人でつまんない」はたけし自身の気持ちと察せられる)*

しゅんは「つまんなくない」と素気なく答えて「お料理」を黙々と作り続ける。

「仲間」と認めてもらうことの意味は次第に大きくなって行き，「仲間」に入っていたか否かでトラブルが起こることもあった(事例14)。この頃になると「仲間」とは単に「一緒に遊びを共有する者同士」以上の意味付けがなされていると感じられた。

事例13でたけしがしゅんに「一人でつまんないだろ」と言っているが，2学期になると「一人である」ことに言及する子が増える。一緒に遊びを共有できる「仲間」を求める気持ちが，「一人である」ことを子ども達に意識させるのだろう。

【事例14】「本当は仲間だったんだよ」　10/17　保育室

小さな積木のお家の周りにたけし，しゅん，まこと，ゆうすけ，こうたがいる。

しゅんとたけしが何かもめたらしく，ゆうすけは「ゆうはたけしの味方だから」と言う。しゅんも「だって俺もたけしの味方だもん。まことだって味方じゃない＊＊」と言うが，たけしは「お前がダンス踊るか一人で」と言う。まことも「一人で踊れ」と言って笑う。

*(運動会直後だったため「踊る」ということが出てきたと思われる。)*

しゅんは他の子にもからかわれ，「やだー！！」と叫ぶ。

*(まずいと思ったのだろう。ゆうすけ，こうたは私の方をちらっと見る)*

たけしがしゅんにまた何か言って，しゅんはたけしを叩こうとするが，たけしがベランダに逃げるので追いかける。その後ベランダでも何かあったらしく，しゅんはベランダに座りこみ，前に立っているたけしに「痛い」と言う。

そこにM先生がやってきて事情を聞く。

しゅんは「だって，ぼくたけしの仲間になったのに」と言う。M先生はしゅんとたけし二人の間に座る。

「だって仲間だったのに，まこと君が仲間じゃないって」と言うのを聞き，M先生は「あ，仲間じゃないって言ったからしゅん君はさー」とたけしとまことに話をする。

しゅんは「本当は仲間だったんだよ」とまた言う。M先生の「さびしかったんだよねー」と言う言葉にしゅんは小さく頷く。

### (2) 「同じ」という意味での「仲間」

子ども達は他の子と「おんなじ」であることにとても敏感に反応し，そしてとても喜んだ。(これは前述のように，鳥光ら（1996）の3歳児の事例でも指摘されている。)

【事例15】「わー3人同じ色ー！」　12/12　砂場

ひろむが遊具の棚からスコップを持ってきて，「ご飯」を作っているゆうすけ・しゅんの所へ「あ，同じ色ー！同じ色ー！」とやってくる。

しゅん「あ，俺も」ゆうすけ「俺も」と持っていたスコップを差し出す。しゅんは「わー3人同じ色ー！」と言う。

それを横で見ていたけんは「俺レッド」と自分のスコップを見せる。するとしゅんは「あ，レッドとレッドでおんなじ」と自分の持っていた赤いコテを差し出す。

落合（1996）は「仲間は対等であるがゆえに，自分と同じという認識を持ちやすい」「この時期の人間観は，他者とは自分とよく似た構造をもっている存在であるという認識といえそう」だと述べている。[8]

この「同じ」という意味で「仲間」を口にした子もいた。

【事例16】「仲間」　9/19　園庭

みき，まみ，あきが園庭にゴザをしき，靴を脱ぎ足を伸ばして座っている。まみがみきの靴下を見て「あ！おんなじ！色は違うけど」と言う。

（同じレースのついた靴下で白と青の色違いだった）

それを聞いたあきは，「あきだけ仲間はずれなんでしょ」とふくれっ面で自分の靴下を脱ぐ。

するとまみは「仲間」と言って自分のはいていた靴下を脱ぐ。みきも同じように靴下を脱ぐ。

### (3) 「戦いごっこでの味方」という意味での「仲間」

入園以来，男児が中心となってよく遊んでいた遊びに戦いごっこがあった。その中で，5月には「仲間」という言葉が出てきていた（事例17）。

小林（1994）は2年保育5歳児の戦いごっこの観察の中で子ども達の中に「仲間同士は戦わない」という内的ルールを見出した。それは戦う「ふり」がいつ本気になるとも限らない戦いごっこの中で，「仲間関係が壊れないための必然性」及び「仲間同士が戦いのふりを楽しむための必然性」から生じたものであったという。

そして，それは「教師が与えたルールではない。ごっこの楽しさを共有してきた5歳児が『戦いごっこ』を楽しむための必然性から生みだしたものであり，経験から感じ取った知恵及び知識ということができよう。」と述べている。[9]この子達の場合にも，「お前の仲間だ」と言って戦いごっこが本気になりそうな場面を回避する姿が見られた（事例18）。

【事例17】「降参仲間になる」　5/16　保育室

ゆうすけとけんが剣で戦っていたが，けんは本当に蹴ったりする。ゆうすけは保育室に重ねて置いてあったマットに寝る。けんが「どうだ，まいったか」と言うと，ゆうすけは「降参，仲間になる。仲間になる」と小さな声で寝たままけんに言う。

けんは「よし，だったら俺のことよく聞くことだな」と言い，ゆうすけも「わかった」と言う。けんは「こっちの方が折れないよ」と自分の持っていた剣をゆうすけに差し出す。

【事例18】「お前の仲間だ」　6/6　保育室　（事例13のあと）

たけしは自分の棚から剣を持ってきて，ゆうすけを叩きに行く。まことのことも叩こうとする。

まことは「俺，敵じゃない。俺敵じゃねえ」と言い，ゆうすけは「お前の仲間だ」と座り込んで言う。

この戦いごっこの際に「仲間」という言葉はよく出てくるが，それと並んでよく出てくる表現に「いいもん」（事例19）「正義」（事例20）等があった。

【事例19】「いいもんだから入れて」　7/4　保育室

ストリートファイターごっこをしていたコーナーで，ゲームボックスからマットに飛び降りる遊びを数人で楽しんでいる。ゆうすけがその遊びに入りたくてボックスに乗ろうとすると，ひろむに押しのけられる。ひろむは「だめ」と言う。

ゆうすけは「ベガっていいもんだから入れて」と言うが（*「いいもん」だから仲間として認めてほしいということらしい*），ひろむは「だってベガっていいもんじゃないもん」と言う。

【事例20】「俺は正義！」　9/26　玄関を入ってすぐのフロア

玄関を入ってすぐのフロアで，数人の子が戦いごっこをしている。こうたとゆうすけが戦っている所へたくやが来て，こうたを叩く。こうたは「修行なのにな

んで叩く！」と怒る。

たくやはけんと戦っていたたけしの所にも行くが，たけしにパンチされる。すると，たくやは「こいつだー」とこうた達を指さす。たけしはたくやに戦うポーズをとるので「違うこっちだー」とまたこうた達を指さす。たけしはこうたをパンチする。こうたは「やめて！俺は正義！」と言って怒る。たけしはこうたをパンチするのをやめる。

これらのことから，戦いごっこにおける「仲間」は「一緒に遊びを共有する者同士」としての「仲間」というだけでなく，「正義の側で敵と戦う者同士」という意味づけが子ども達の中でなされていることがうかがえる。

「正義の味方」の自分達（「仲間」）と「敵」との「戦い」の中で，子ども達は「こちら側」と「あちら側」を意識することになる。これは，「内」と「外」とも言い換えることができよう。

津守（1997）は「人間がだれでも幼いときから学び，会得し，展開させてゆく」ものとして「内と外」の遊びがあり，それを「基本的経験と名づけてきた」と言う。例えば，内のものを外に出したり，外のものを内にいれたりすること，自分が戸棚の中に入ったり出たりすることである。[10)]

子ども達は戦いごっこの中で，この「内と外」の遊びを身体のレベルで経験しているのではないだろうか。

もっとも，そう考えて行くと，例えばごっこ遊び等でお家を出たり入ったりすること，他の子達の遊びを意識すること（事例21）等，他の遊びでも経験されているのかも知れない。

【事例21】「あっちの仲間になっちゃったんだよ」　6/20　保育室

たけし，まこと，ひろむ，しゅん，たくやで保育室の真ん中に大きな積木のお家を作る。

一方，さやか，ゆか，まみ，あきはお姫様ごっこをするため，M先生に手伝ってもらい，おままごとコーナーを「お城」にしている。

積木のお家からまことが「お城」にやって来て「入ーれーて」と言う。ゆかは「だーめーよ」と言うが，M先生が「王子になる？」と言うと，あき，さやかは「王子ならいい」と言う。まことも「何でもいい」と言うので，王子に決まる。

まことは上機嫌で積木の家に戻る。そして「どっちにしようかな」と言う。たけしは「ばかー，こっちだー」と言うが，まことは「お城」に行ってしまう。

その後，ずっとつまらなそうにしていたたけしは，「誰か，このおうちに入ってくれー！」と叫ぶ。一緒にお家にいたたくやは「入ってるよ」と答えるが，たけしは「もう一人」と言う。たくやは「お城」を見て「まことが（お家に）入ってない」と言う。たけしは「だってあっちの＊＊になっちゃったんだもん。あっちの仲間になっちゃったんだよ。まみちゃんのなーかーま」と言う。

### 4　保育者が語る「仲間」

#### (1)「一緒に遊びを共有する者同士」としての「仲間」

M先生は入園当初，子ども達に対して遊びの中で一人ひとりに，またクラス全員の場でも「お友達」は口にしていたが，積極的に「仲間」という言葉を口にすることはなかった。記録の中でM先生が初めて「仲間」を口にしたのは7月になって，遊び相手が見つかった子に対しての言葉かけだった（事例22）。

その後，前述のように子ども達が一緒に遊びを共有することが多くなり，「仲間」を口にすることが増えてくると，M先生が「仲間」を口にすることも増える。M先生は子ども達の遊びを援助する際には，子ども達が言ったことをもう一度反復して確かめてから対応されたためである。

M先生は，その日一緒に遊びを共有した「仲間」と一緒にいたいという子ども達の気持ちに合わせて，お弁当の時間を設けたりすることも多かった（事例23）。

【事例22】「よかったね，仲間が見つかって」　7/4　保育室

たけしはそれまで他の子達と遊んでいたゲームボックスからマットに飛び降りる遊びをやめる。そしてゆうすけと何か話している。ゆうすけは「たけし君いーれーて」と言う。

たけしはマットを引っ張って保育室の別の場所に持って行く。M先生も手伝う。おすもうが始まる。M先生は「よかったね，たけしちゃん，仲間が見つかって」と言う。

【事例23】「仲間の人がみんな支度できたら」　2/6　保育室

この日は午前中の遊びの中で作った積木のお家やままごとコーナー等をきれいに片づけて，そこでお弁当を食べることになる。そういう場を持たない子は，すきな子の所に入れてもらう。

お弁当の支度をしている子ども達に，M先生は「じゃあ，一緒に仲間の人がみんな支度できたらね，いただきますしていいよ。みんながそろったらいただきますしていいよ。仲間の人と」と声をかける。

もっとも同じような場面で「仲間」でなく「お友達」と言うこともあった。「一緒に遊びを共有する」遊びの場面ではなく，食事の場面だったからかも知れない。

**(2) 「保育者が意図的に作る小グループ」としての「仲間」**

2学期も終わりに近づいた頃，M先生は初めて好きな子同士で男女混合の小グループを作った。記録の中でM先生が初めてクラス全員の前で「仲間」を口にしたのはこの小グループでお弁当を食べることを伝えた場面だった（事例24）。

この頃には男児のサッカー遊びに女児も誘ってみたり，といろんな子と触れあってほしいというM先生の思いが伝わってきた。もちろん今までも自分達で好きな遊びをする「仲間」以外でも，みんなでゲームをしたりする時にグループにわかれることはあった。

しかし，このようにある一定の期間メンバーが固定されることは初めてである。ここでは「保育者が意図的に作った小グループ」にも「仲間」という意味づけがなされたことになり，子どもたちの培ってきた「仲間」の意味もさらに広がったと思われる。

【事例24】「昨日作った仲間で」　12/5　保育室

お弁当の時間になる。M先生は「昨日作った仲間で食べるよ」と黒板にはってあるグループわけの3枚のカードを指さす。

カードには，それぞれバナナの絵，オレンジの絵，ももの絵がかいてあり，各グループの子の名前がひらがなでかいてあった。

## 4　おわりに

本研究は子ども達の入園からの一年間を参与観察し，子ども・保育者が「お友達」「仲間」を口にする場面を事例として取り上げ，「お友達」「仲間」をどのような意味で捉えているのかについて検討した。

その結果は大きく以下のように分類された。

1　子どもが語る「お友達」
(1)　「知っている子」あるいは「仲良しの子」
(2)　「同じクラスの子」
(3)　「ごっこ遊びの中の関係」
2　保育者が語る「お友達」
(1)　「仲良くすること，配慮することが必要な相手」
(2)　「同じクラスの子」
3　子どもが語る「仲間」
(1)　「一緒に遊びを共有する者同士」
(2)　「同じ」
(3)　「戦いごっこでの味方」
4　保育者が語る「仲間」
(1)　「一緒に遊びを共有する者同士」
(2)　「保育者が意図的に作る小グループ」

以上のように「お友達」「仲間」について大まかに分類したが，その意味するものは一様ではなく，子どもや保育者は，幼稚園生活の中で様々な意味をこめて使っていることがわかった。もちろん，ここであげたものだけでもないだろう。

そして保育者が提示した「お友達」「仲間」を受け入れて行くだけでなく，園生活を送る中で子ども達に「お友達」「仲間」の意味を培う経験にもいろいろな場合があることが示唆された。

上にあげた「お友達」「仲間」について，入園から一年間での変容を振り返ってみる。

入園当初は「お友達」（1(1)）を口にする子はいたが，「仲間」については，「仲間に入れて」という「儀式的表現」が中心だった。

幼稚園生活が始まり，母親から「お友達と仲良くするように」と言われたり，毎日の生活の中で，保育者もトラブルを起こした子に対して（2(1)），またクラス全員が集まった場（2(2)）でも「お友達」を口にしたこと，そして，少しずつ知っている子が増え，仲良しになることもある中で，「お友達」が意識されていたと思われる。

その後，子ども達がそれぞれ好きな子と一緒に好きな遊びを共有する経験を重ねる中で，「仲間」（3(1)）を口にする子が増える。単に仲良しの子がいるだけはなく，一緒に好きな遊びを共有できることが幼稚園生活の中で重要になって行ったためと思われる。

（そこでは「同じ」（3(2)）であることも大きな意味　を持つと思われる。）

また，それを支える保育者も，子どもの変容に合わせて遊びの場では「仲間」（4(1)）を口にするようになっていった。しかし，やはりトラブルが起きたり（2(1)），クラス全員の場（2(2)）では保育者は「お友達」を口にすることが多かった。鳥光ら（1996）のいう「公的なお友達概念」を子どもに育てるためと思われる。

またその一方で，あまり意識せずに使っていたり，習慣化しているのではないかと思われることもあった。

（子どもの中でも保育者の影響か，単に「同じクラスの子」という意味で「お友達」（1(2)）と言う子もいた）

そして，2学期の終わり頃に，保育者はそれまでの子ども達のいう「仲間」ではなく，保育者が意図的に作った「仲間」（4(2)）を提示した。これは，保育者がそれまでの子どもの育ちを踏まえ，子ども達がそれまで経験していない「仲間」の経験を意図したものと思われる。

また，鳥光ら（1996）は，子どもは「自ら概念を構成し，それを能動的に運用して幼稚園生活を形成する存在」[11]と述べているが，S園の子ども達も「お友達」「仲間」について，幼稚園生活を重ねる中でその意味を知るだけでなく，独自の用い方をする子もいた。

「友達のことにしよ」と言って，自分達の遊びと他

の子達の遊びを「つながってる」ことにしたり（1(3)），戦いごっこの中で「仲間同士は戦わない」ことで，うそこの戦いが本気になることを避けたり（3(3)），ということを毎日の園生活の中で遊びが楽しくなるために自分達で生み出していた。[12)]

以上，様々な考察をしてきたが，本研究は子どもや保育者が「お友達」「仲間」を口にした場面を取り上げて考察したものである。そのため言葉に表すことの多い子に事例も偏ってしまった。子ども達・保育者の言葉を手がかりに以上のような考察ができたわけだが，言葉に表すことをしない子もいるわけで，それがこの研究方法の限界と言える。

また，鳥光ら（1996）のように一人の子に焦点をあてて，その子の中でも「お友達」「仲間」を使い分けている姿についても丁寧に見て行く必要があるし，本研究の事例でも表れていた個人差についても検討して行く必要がある。

そして，本研究は，ある園のあるクラスの子ども達と保育者を考察の対象としている。S園と異なる保育方針，保育形態の園，保育観の違う保育者のクラスであれば，当然子どもの変容も保育者の援助もかわってくるはずである。上にあげたような課題をふまえ，他園でも参与観察を行って行きたい。

## 注

1）鳥光美緒子・青井倫子・北野幸子・二宮俊一郎・中坪史典・山内紀幸・大江昌恵・真宮美奈子・宗田はるこ，幼稚園生活に関するエスノグラフィー：幼児の「仲間」概念，幼年教育研究年報，**第19巻**，pp. 19-28，1996.

2）William A. Corsaro, Routines in the Peer Culture of American and Italian Nursery School, *SOCIOLOGY OF EDUCATION*, 61-1, p. 2, 1988.

3）前掲書1）pp. 19-20.

4）William A. Corsaro, *Friendship and Peer Culture in the Early Years*, Norwood, NJ: Abllex, pp. 168-169, 1985.

Corsaro (1985) がこの研究で対象とした子ども達は，入所の時点で2歳10ヶ月～3歳10ヶ月，3歳10ヶ月～4歳10ヶ月の2クラスであるが，年齢でわけずに分析しており，本研究の子ども達より年少の子も含まれている。

また Corsaro の指摘した friendship への言及は，play groups にいる子とそこに加わりたい子の間で起こるものだが，事例1の場合はそれを見ていた**ゆか**がはじめに言及しているという違いがある。

5）前掲書1）pp. 23-24. 私が今まで見てきた幼稚園の中には，クラス全体の子に呼びかける時に「子ども達」と言う園もあった。

6）無藤隆，子どもたちはいかに仲間か否かを区別するか，科学朝日，June, p. 20, 1992. 無藤は「仲間」を「一時的遊び集団」と定義している。

7）前掲書4）pp. 168-169.

8）落合正行，子どもの人間観，pp. 96-103，岩波書店，1996.

9）小林紀子，「戦いごっこ」における遊びの流れを規定するもの―内的ルールの関連性を巡って―，日本保育学会第47回大会研究論文集，pp. 428-429，1994.

10）津守真，保育者の地平，pp. 226-231，ミネルヴァ書房，1997.

11）前掲書1）p. 19.

12）紙面の都合上取り上げられなかったが，「仲間」に近い意味を持つものとして「チーム」という表現をした子もいた。

付記：本研究に長期間にわたりご協力下さいました幼稚園の先生方，そして子ども達に記して感謝申し上げます。

（平成11年9月10日受理）